



# H a f a A d a i

令和2年12月1日  
グアム日本人学校  
学校たより  
第5号

## 「一足の靴下」

校長 工藤雅敏

それは、12月のとても寒い日の夕方、ニューヨークの下町で起きた出来事です。

中校生になるジョニーは、恵まれない人々のために、無料給食センターでボランティア活動をしています。

その日の夕方、一人のおばあさんがやってきました。古ぼけた洋服と、穴の空いた黒い靴を履いていました。とても、寒そうにしていました。驚いたことに、よく見ると、真冬の夜だというのに、靴下を履いていないのです。

「靴下はどうしたのですか？」と聞くと、「無いんですよ。」と、ポツリと言いました。その姿はあまりにも悲しそうでした。「どうしようか？」と思ったのですが、今この場で、おばあさんにあげられるのは、暖かい靴下だけです。

「おばあさん、僕ので申し訳ないけど、良かったらこれを履いて。」ジョニーは、今日買ったばかりの白い靴下を脱いで、おばあさんの足に履かせてあげました。

おばあさんは、まるで、自分の孫を見るように、ジョニーを見つめていました。そして、「ありがとう。本当にありがとう。寝るときに靴下があれば、どんなにいいかと思っていたんだよ。靴下を履いて寝るなんて、何年ぶりだろう。とっても温かいよ。」そう言って、うれしそうに帰っていきました。

次の日の午後、無料給食センターに警察官が訪ねてきました。身元不明の死亡者の確認をするためです。

「このおばあさんに見覚えはありませんか？」写真を見ると、昨日のおばあさんでした。警察官の話によると、このおばあさんは、身寄りも友達もなく、暖房すらない部屋に独りで住んでいて、今朝、たまたま訪ねてきた役所の方が、死んでいるのを発見したそうです。

話は続きます。「それが、どうも、妙なんだ。その死に顔はとても嬉しそうな、穏やかな顔だったんだ。人間、死ぬ時はあんな風でありたいね。」

たまたまなくなったジョニーは、「そのおばあさん、靴下を履いていましたか？」と聞きました。「そういえば、新しい、男物の白い靴下を履いていたな。」「他の洋服は古びてボロボロだったけど、靴下だけは真新しいので、よく覚えているんだ。」

ふと、昨日の、おばあさんの言葉が甦りました。

「寝るときに足が温かかったら、どんなにいいかと思っていたんだよ。」

あのおばあさんのうれしそうな笑顔が、いつまでも、心に残っているのです。